
旅（仮題）

bluewind

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅（仮題）

【著者名】

205101

bluewind

【あらすじ】

旅をしている男、辿り着いたある村でのお話。（頗るした小説です。更新予定は殆ど無し）

01・橋～少女（前書き）

若干の裸体描写などがありますので、気になる方はお気をつけ下さい。

01・橋の少女

川を渡るために、上流の橋までいくらか歩いていかなくてはならぬようだ。前日、一昨日と、雨続きで、道は土が溶けてひどくぬかるんでいる。靴の中まで染み込んだ泥だらけの足で、グチャグチャ鳴らしながら、川沿いを歩いていく。ここが暖かい土地だから良かつた。全身雨に濡れて、服が張り付いている。背中の鞄の中もきつとひどいだろう。一度落ちつけるところに着いたら、すつきりしたいところだ。

雨粒が体を叩く音、川の爽やかな流れの音に耳を傾ける。周りに人の気配は全く無い。町まではまだまだ遠いのだろうか。

やがて黒っぽい木の橋が見えてきた。そして、橋のたもとに人影があることにも気付いた。元気が出てきて、勢いづいて大きな声で話しかけた。

「こんにちは！　随分雨が降つてばかりで、少し肌寒いですね」その者は雨と泥で薄汚れていて、膝を抱えて丸くなり、土手に座り込んでいる。川面をじっと眺めていて、ゆっくりこちらを振り向いた。小さく、頷いたように見えた。顔が真っ黒なのは、泥と共に、口ひげやあごひげをモウモウとはやしていた。男の目は真っ白く、見えない視線でこちらを見ている。

「この橋を渡れば町に着きますか。まだ歩きますか」男は裏返ったような甲高い声を出して答えてくれた。

「橋を渡ればすぐだよ。道は少し左に曲がっていつて、十字路に出るが、そのまま真っ直ぐ行けばいい」

「ありがとう」

こちらは歩きながら、もつ橋の上まで来ていたので、欄干から見下ろしながら、男にお礼を言った。

橋を渡つている間、男はずつと見つめているのが分かった。

橋を渡りきり、緩い下り坂の道を、降りる勢いに任せて力無くガクガクと歩いていく。すると道の先に、また新たな人影を見つけた。それはこちらに向かつて歩いていて、お互に次第に近付いてきた。人型の影は色合いをはつきりと見せてきて、その裸の姿……少女がとぼとぼと歩いていた。気持ちは高ぶつてくる。しかし今度は落ち着き払つて優しい声で訊ねた。

「市場はどうちに行けばある?」

空腹からその一言がつい出了た。朝から何も食べていなかつた。

少女は後ろの方を(こちらから見て道の先を)指して言つた。

「ここをずっとといけばある」

「ありがとう、まだ少しかかるのかな」

「犬を見なかつた?」

唐突な少女の質問。

「いいや、橋を渡つてきたんだけれど、それまで何も見なかつたよ」

少女は頭を下げて、すれ違ひ、そして橋の方へ……渡つていつた。

少女は腰の下の方まで長い髪を、後ろで縛つて束ねていた。一步毎に大きく揺れて、お尻の周りで跳ねている。そして雨の向こう側に消えていった。

ふと、橋の向こうの男のことを思い出した。そして、また歩き始め る。

幾らか歩いていると、後ろから足音が近付いていることに気が付いた。振り向くと、女の子だった。

少女は追い越して、突然道の脇の草むらに入つていつた。気になり立ち止まり、しばらくすると少女は出てきた。果物らしい丸いもの

を両手に持っていた。左手の方を上げて、うらに差し出した。受け取った。

丸く柔らかい、表面の黄色い皮をむいて、中の赤っぽい果実をひとつ房、ちぎり取つた。口に入れると、とても甘く美味しい。見た目から酸っぱそうに思えたのだが、全く酸っぱくなく、まるで砂糖菓子のように濃く甘い。

少女はジッとしてちらを見つめている。

「犬はいいのかい」

「うん」

そして二人で、もう片方の手の果物を、分け合つて食べて、一緒に歩き出した。やがていつの間にか、町の中央らしい、市場に着いたようだつた。

02・市場散策／川で水遊び

木の骨組みに布を張つた小さな傘の下に、それぞれのお店が、果物や、野菜、道具などを並べている。そこはちょっとした広場で、そんなテントがあちこちまばらに、ポツポツと店を開いている。広場の木の周りに、赤や黄色の鮮やかな花が咲いている。その横に座つて、花に何か白い粉のようなものをかけている。すると花の頭は踊るようにな勢いよく跳ねる。それは見世物屋のようだった。

でも……それは雨のせいいか分からぬが、お店の数はそれほどなく、すかすかだった。

そして誰もが、男も女も茶色い肌をさらしていて、素裸だった。傘の端から滴り落ちるしづくに腕が濡れると、手で払つてそこを搔いて、キョロキョロとお密を探している。

大きい乳が長く垂れた女の店を見ると、これが不思議な感じで面白かった。

服を作つたりするには小さすぎる、何かの動物の皮をなめしたような、あめ色の生地の端切れ。丸い貝の殻のような赤い小石。ただの棒切れにも見える、先の尖つた針……しかし鎧にびっしり覆われている。紙を重ねて積んであるのは、元々は本だつたのだろうか、黄ばんでいて相当痛んでいる、その上、雨に濡れていても一向にお構いなしという風。ガラクタの市だ。

その年のといった女は、こっちを見て一〇一一〇笑つて、手を振つて呼んでくる。近寄つてみると。

「さあ早い者勝ち、見ていつて」

彼女はこちらを向いていながら、透かして先の遠くの方を見つめているよう。棒切れを手に取る。袖に擦つてみると、黒い線が書けた。

「これをちょうどい」

「ハイハイ、それならあなた様の髪と交換だよ」

頭に手を当てる。長い間切つていなくて伸びきっていた髪を、指で

つまんで擦る。懷に入れてあるナイフを取つて、根元の辺りからバツサリとほとんど切り取つた。女の太ももの辺りに乗せてあげた。

「あいがと、あいがと」

回らない舌でお礼を言われ、黒い棒を取つた。女は手にした髪を、一本一本丁寧に集めていて、端を合わせて束ねた。尻に敷いている布の上に置いて、端を折り曲げて挟み込んだ。

「さあ早い者勝ち、見ていて」

ご機嫌な彼女は、さらに威勢のよい声を上げた。

少女の方を向いて、言った。

「髪が随分汚れていた、川で泥を落としてくるよ」

少女も一緒に、また川の方へ戻つた。

雨は幾らか弱まっているようだが、以前細かい粒が振り続けている。雨で流れの早い川、小石の敷き詰められた川原を裸足で歩く、いや上着も下着も全て脱ぎ捨てていた。泥に、破れ目、黒い布切れのそれを広げて、雨に綺麗に濡れるように川原に置いた。

川へに入る。浅くて足はくるぶし辺りまでしか浸らず、中ほどまで歩いていく。中に体を沈める前に、霧のような雨で全身を濡らした。同じように素裸の少女も一緒に入ってきて、体をゆっくりと下ろしていき、座り込んだ。それほどに川は浅瀬で、そして次第に後ろへ体は傾いていき、ベッドに寝そべるよつに清流の中に入り込んだ。わずかな乳房の膨らみの周りに渦が巻き、白い泡を立て、足先でそれは消散していく。少女は皿をつむって、ゆったりとした川の流れの中に身を任せていた。

いつたん川から出て、服を置いたところに戻り、先ほど手に入れた

筆を取つた。また川に入る。

少女の横へ行き、足を組んで座り込む。そして美しく隆起した乳房を、先端から下りていく滑らかな曲線を指先で撫でる。

薄い皮一枚の奥には、かわいらしい小さな肉体と魂があり、それは白っぽく薄く透明で、ほんの少しかたい。呼吸の度に小刻みに震え、熱を持ち赤く輝いている。

筆を持ち、その艶やかな肌に線を描く。とりわけ熱を持った熱い部分に……お腹のへその辺りから腰の方へ、そしてふくらはぎを、濃く深く塗りたくつていく。川の流れの中でも、この筆で書いた線や色は消えることは無かつた。

小さな肉体の筋肉、体毛、傷を感じ取り、筆先で撫でたりして遊ぶ。その度に少女は体をくねらせたり、時に小さく跳ねる。

少女は寝そべつたまま、こちらを見つめている。

まどろみ。少女が先に眠つたのか、それともこちらが先か。記憶の端に残つてゐるのは、彼女は川のベッドで眠つてゐる姿。いつの間にか、一人とも寝そべつていた

少女は身を起こして、手で水をすくい取つて飲んだ。まねをして、こちらは両手を大きく組んで沢山すくい取り、喉を鳴らして何度も飲んだ。

白い空が次第に暗く染まってきた。一人は一緒に立ち上がり、濡れた体や手足を、手を滑らして水滴を拭うと、川から上がった。絵は残っていた。

また、町への道に戻つた。

道の外の草むらに、茶色の犬がいて、舌を出してこっちを見ていた。

「これをお食べ」

少女はそう言って、犬のそばに立つ、黄色い皮の果実の木の実をもぎ取つた。犬の足元に置いて、また戻つた。

「さつき探していた犬かい」

少女は首を横に振る。

「もうひとりの一緒についている子、いつも後ろにいるの。あの子が振り向くと、この子はすぐ嬉しそうに顔を上げるの。でもいつも静かに後ろについてくるの」

「どこにいつちゃつたんだろうね」

「いつも気付いたら帰つてるの。あたしが川で遊んでいると、どこかへ行つちゃうの。だから、また帰つてくる」

少女の方を見ると、あの黄色い果物を一つ持つていて、皮をむいていた。実を一つちぎると、こちらに差し出してきた。受け取り、食べる、そのまま少女の方を見ていた。

「どこから来た。」

「どちらかが言ったような……それともお互い一緒に言つたような……」

…、でも次の言葉は自分が言った。

「ずっとこうして、歩き続けている。暑いこといや、寒いこといや、明るいことや、暗いことや。世界は本当にいろいろなところがあるから」

少女の継いだ次の言葉は、むしろ独り言に近かつた。

「あたしのお父さんも旅をしていて、ずっと前から長らく帰っていない。でももうじき帰ってくるの手紙が届いたの。あの子が持ってきたくれて。大きくなつたお前を見るのが楽しみだつて。お土産を沢山持つてくるつて。あたしが物心つく前に出ていったから

あの子とは、犬のことを指しているのだろう。

「帰つてきたら、美味しいごちそうを作つてあげて、旅の話を聞いてあげるといい。辛かつたことも、癒されるさ」

それだけしか言つてあげることが出来なかつた。

「あなたは、いつ旅立つの？」少女は訊ねた。

灰色の空を眺めた。そして、顔を下ろした。市場が見えてきた。この町は、雨が似合ひすぎだつた。テントが濡れて輝き、その元で根を下ろしたように生きている人たちは、穏やかだつたが、力強くもあつた。

「青空が見えたら」

すると少女は、思つていた通りの答えをした。

「雨はずっと降り続けるよ」

少女は駆け足になつて、市場の真ん中へ入つていく。その後ろを早足でついていく。

市場の広場を真っ直ぐ通り抜けて、右手に曲がると、背の低い黒っぽい木の掘つ立て小屋が一つ……二つ……三つ、まばらに建つてい

る。

三角屋根の際から、とめどなく雨のしずくが滴り落ちている。腐つたり痛んだりしているところを、つぎはぎつけはぎ、別の木を付けて修復したらしい後が無数にあった。でこぼこした壁に、窓がとても大きく口を開けている。中で影がうごめいているのが遠目でも分かる。

見ていると、町のあちこちから帰路についた人たちが、次々小屋の中に入つていく。小屋という言い方は少し違う感じがして、ちょっとした広場くらいはありそなくらい大きい。この三つの小屋が、この町に住む人たち皆の寝る場所だった。

少女は小屋とは少し離れたところで、草むらの中に立つてジッとしている。

やがて用を終えて、じちらの方に戻ってきた。右手の方にある一つだけ少し離れた家へ、一緒に中に入つていった。

そこには、まるでそこにもう一つの町があるようであった。地面には大地の上にわらが敷き詰めてあり、皆がそれぞれ好きなところに、好きなように寝転がつたり、足を組んで座つたりしている。あちこちで談笑が沸き、話し言葉が飛び交つてゐる。好き好きに組んで話し合い、右の一人と左の一人が交じり合つて大所帯になつて、一際賑やかで騒々しくなる。と、その中の一人が抜けて、ずっと遠くの方にいる者に、大きな声を掛ける。相手も应え、何かをそつちに投げた。受け取り、感謝の言葉を言うと、また元の輪に戻つた。するとその中の別の者が立ち上がり、さつき投げよこした者の方へ行つて、お互い手を上げて叩き合つて、嬉しそうに喚いている。

まるで混沌としていて、誰が、何を話しているのか、はたから見ていると全く分からぬ。無数の言葉が屋根の中で、あたかも動物の吠える野太い声のように、こだましている。しかしその中で皆、疎通が上手くいっているようで、馬鹿みたいな騒ぎに楽しそうだった。においもさわやかで、あちこち煙草の煙が白く漂つてゐるが、それ

はまるで香水のようだつた。

あの筆をくれた女がいた。右手で煙草をふかし、左手は足の指をこねるようにいじりながら、仲の良さそうな肥えた女と話をしていた。女の手元が黒くなつていて、よく見てみるとそれは髪の毛で、あの時渡したものに違ひなかつた。手の指一本一本に髪の毛を巻きつけて、手の全体を黒く被つてゐる。まるで毛のもつれたボロボロの手袋をはめているように見えた。そして今度は足の指へと巻きつけようとしていて、黒い靴のように縛つていくのだった。

そして肥えた女の下へ、少女はそばへ寄つていつた。少女の母親らしかつた。すんぐり太く丸っこく、背中を丸めていて、上田遣いで覗くように周りを見ついている。友達の言つこと、所作に満足そうに頷いたり、笑つたりしている。しかし口が利かないらしく、言葉が無いかわりに、満面の笑顔でダラダラと涎を垂らしている。そして何故か、涙の粒を目の端から、瞬きの度にポロポロと落としている……それは悲しんでいるためというわけではなく、身の奥底に備わった体質的な要因によつて、流さずにはいられないといった風だつた。こつけいに、笑い、涙を垂らす、泣きながら、笑う。

底抜けの馬鹿騒ぎの中でも、彼女一人特に輝いていた。

少女は持つていた果実を一人の前に置き、かわりにその横に置いてある、色あせた紙の上に載つてゐる、黒っぽいかたまりを取つて食べた。

話に夢中の二人は少女がいることに気付かず……と思つたら、まるで最初からあつたもののように、果実に自然に手が伸びて取つた。髪で巻いた手は滑り、なかなか上手く皮が剥けないようだつた。やがて中身が取れて、数本の髪の毛交じりに、一緒に食べてしまつた。

「うまいよーこれ！」

少女に向かつて、どびきり「機嫌な声を上げた。

その果実を、黒いかたまりを、横に座つてゐる者達が手を伸ばして摘み取る。男が、その子供らしき小さな子に与える。

少女は立ち上がり、少し離れたところに立っている老人の方へ近寄った。老人の腰には白い布の袋が下がっていて、少女はその口の中に手を突っ込んだ。老人はその力で下に引っ張られて、よろめいて、その場に座り込んでしまう。少女は構わず、その中から丸い木の実を摘み取つて、口の中に放り込んだ。老人は、ちょうど目の前に置いてあつた、真四角の不恰好な木の水筒を取つて、豪快にひっくり返して頭に被つて、ついでに水を飲んでいるといった感じだつた。だからそれに倣つて、食べたくなつた黒いかたまりを摘み取つて食べて（甘くて苦かった）、老人の手から水筒を受け取つて飲んだ。そしておもむくまま、グルリと後ろにひっくり返つてわらの感触を味わい、腕や手足を大きく広げて寝転がる。ボウッと、ざわめきを聞いている。

暗闇の中で、組んだ腕に頭を乗せて寝転んで、目をつむつたりあけたり。朝日が昇るそのときをジッと待っていた。夜半は大分過ぎ去つて、朝が近いことが外の冷氣の具合から分かった。あれだけの騒ぎだったタベから、今はもうシンと静まっている。それこそ逆に、ここに何十人もいて寝ているというのが、不思議に思えるくらいだつた。

誰かが、膝の音を鳴らして立ち上がったのが分かった。その様子を遠目で、入り口の濃い蒼い枠の外へと出て行くのを見ていた。その横の大きな窓も、蒼色は濁つている。まるで壁に描かれた抽象的な絵のように、濃淡は纖細で美しい。そしてそこに一際色の濃い部分があつて、真っ直ぐ立つていて、その影は微妙に揺らいでいた。

目の前に転がっていた果実を取り、ゆっくり起き上がつた。ぼんやりする頭を抱えて、入り口へと、乱雑に寝転ぶ人たちの足に気をつけながら出でていった。

「食べますか」

手に持つていた果実を、影の男に差し出した。泥だらけの、ひげがモジヤモジヤはえた、白目の男だつた。

男は無言で手を差し出した。震えている手に、こぼれ落ちないようにな、ゆつくりその手の中に納めてあげた。頬がこけ、顔色は白く生気が無く、肉体は枯れ切つて、今にも魂が抜け落ちてしまいそうだつた。皮を剥く力も無いらしく、指は皮の上を滑るばかりだつた。取り上げて、すぐにサツと剥いてあげて、もう一度手渡した。男はそのままかぶりついで、歯でちぎつて何度も噛んだ。垂れた汁が、口から喉を伝つて、真っ黒な服に染みる。

「ここで、休んでいかれたらどうですか」

男はとても小さく頷いた。

「いまにもくだけて倒れちまいそつだ」

男は掠れた声でそう言って、汁でべとついた手でこちらの肩を押して入つて、闇の中に混じつていった。

すると今度は、少女が外からやつてくるのが見えた。すれ違つ時に、少女の前に果実を差し出した。少女はこっちを見て頷いた。

「お父さん、もう来ない」そう言つた。

そして、母親と女性のところへ……丸くなり、眠つた。

外は段々と蒼さに明るさを持ち始めていた。その冷たい空気を胸い

っぱい吸いたくなつて、道に出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0510i/>

旅（仮題）

2010年10月15日21時01分発行